Pick up!
PLAY HOUSE

芸劇dance

田中泯ダンス「外は、良寛。」

Min Tanaka Dance: RYOKAN, the minute neighbor.

「みんじゃが」の味

今年（2022年）の春先に田中泯さんをインタビューする機会があった。「場踊り」京都公演の最中で、当初の予定は公演後に2～3時間。ところが、興が乗ったのか泯さんの話が止まらず、2日間にわたって計10時間余り、じっくり拝聴することができた。

驚いたことがいくつもある。5日に及ぶ連続公演中、しかも踊った直後だというのに、まったく疲れを見せずに話し続ける気力と体力。数十年前の出来事を、あたかも昨日のことのように筋道立てて語る記憶力と描写力。そして何よりも、踊りに対する愛と哲学。紙幅の制限ゆえに涙を呑んで削った箇所も多いが、骨子はPANJのサイト（*1）で読める。

良寛の話も出たけれど、さほどの量ではなかった。印象的だったのは「良寛なんて引き算ばっかりですからね」というひとこと。もちろんこれは、大愚を号とした賢僧の生き方への称賛であり、と同時に「足し算」ばかりの現代の踊りへの批判である。だが僕は、マルセル・デュシャンの「引き算する、引き算する、引き算する。それが私の強迫観念になっていた」という言葉（*2）を思い出した。瞬時に良寛とデュシャンと田中泯が重なった。

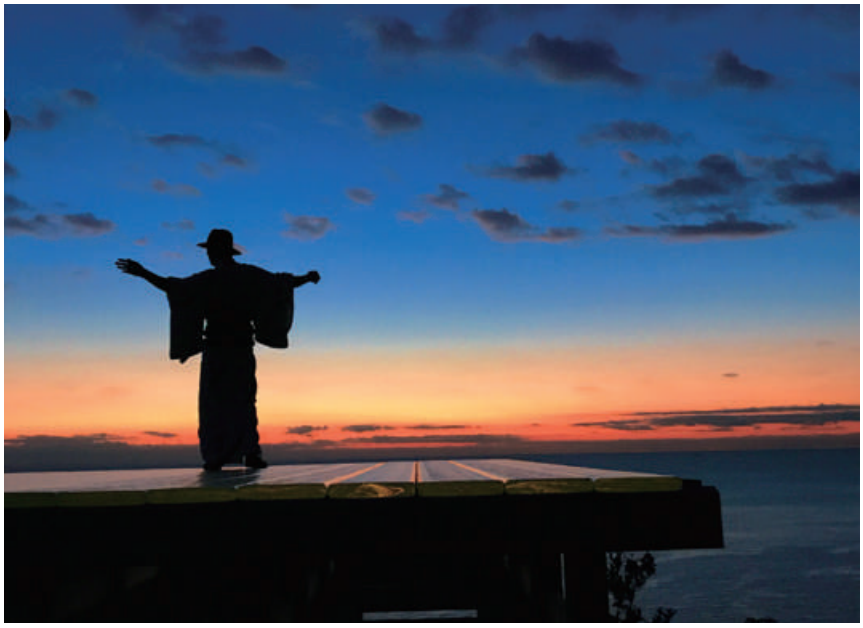
ミニマリズムという高尚なお芸術の話ではない。デュシャンはいまから半世紀も前にクレイジーなアート市場を苦々しく思い、功成り名を遂げた後も質素な生活を送っていた。渡米した荒川修作にソース抜きのスパゲッティを食べさせた話が知られている。もっともそこには、無名の青年に貧乏暮らしを覚悟させる意図があったのかもしれない。

良寛についてはあらためていうまでもない。「生涯懶立身 騰々任天真 嚢中三升米 炉辺一束薪……」。立身出世などどうでもよく、あるがままに生きてきた。袋の中に米が三升、炉端には薪がひと束。それで十分だというのである。

泯さんはどうか。晴踊雨踊にして晴耕雨読の百姓（ひゃくせい）である。嚢中の米は三升どころではないだろうが、日々の暮らしはやはりつましいのではないか。そういえば7月の京都公演の折りに、「スー族から分けてもらったインカの芋」を山梨で育てたという「みんじゃが」を劇場ロビーで売っていた。購入して食したところ、単独でも何かと合わせても実にうまい。ソロでも共演でも味わい深い、泯さんの踊りを彷彿とさせる。

泯さんは、良寛や道元、デュシャンやセラ、ベケットやブルック、世阿弥や土方、フーコーやカイヨワを吸収している。それでいて、知識の枝葉を注意深く剪定し、衒学臭を漂わせることはない。上の詩は「夜雨草庵裡　双脚等閒伸」の二句で閉じられる。草庵ならぬ劇場の裡で、出世欲やら何やらまみれの俗世を離れ、悠々と心のどかに双脚を伸ばす。「みんじゃが」のつくり手によるそんな踊りを早く観たい。

文：小崎哲哉（『Realkyoto Forum』編集長）



©Madada Inc./Rin Ishihara

本作に美術参加する現代美術作家・杉本博司の江之浦測候所で「場踊り」する田中泯。

©Madada Inc./Rin Ishihara

12月16日㊎～18日㊐
プレイハウス 詳細はP12へ

ダンサー田中泯が、著述家の松岡正剛、現代美術作家の杉本博司らとのコラボレーションで挑む待望の新作公演。

*1 https://performingarts.jpf.go.jp/J/art_interview/2204/1.html
*2 Marcel Duchamp, 'Propos' in "Duchamp du signe," edited by Michel Sanouillet and Elmer Peterson, 1959/1976, p.167（拙訳）